

富山縣は新潟縣の半分、愛知縣は静岡縣の三分の一、岐阜縣は長野縣の三割に減ずる。常陸の人が長野縣に旅行して、常陸方言丸出して話したとすると、十言の内六言までは通ずるが、一足日本アルプスを越えて岐阜縣に這入ると十言の内二言しか通ぜず、この時初めて、言葉に不自由を感じると云ふ筋合である。國境を一つ越えただけで、類似性が七割を減ずる所は他に例がない。即ち長野岐阜の國境は日本内地に於ける最大最深の方言境界線である。

アクセントによる東西方言の境界は之と少し趣が違ふ。服部四郎氏の研究によつて明にされたアクセントの境界線は、岐阜縣に於て揖斐川に沿うて居り、之から東を東方アクセント、西を西方アクセントとすることになる。たゞし大垣市は東方アクセントに入る。この境界線は極めてはつきりとしてゐて、三重縣北部の長島と桑名は揖斐川を距て、兩岸に對峙してゐるが、そのアクセントは左の如く違ふ。

長島	アト	イキ	ウミ	カサ	シル	マツ
跡	息	海	傘	汁	松	
桑名	アト	イキ	ウミ	カサ	シル	マツ
長島	アキ	カメ	オケ	コト	ハル	ムコ
秋	雨	桶	琴	春	婿	
桑名	アキ	アメ	オケ	コト	ハル	ムコ

長島	アシ	イス	オヤ	ウタ	エリ	ナミ
足	犬	親	歌	襟	波	
桑名	アシ	イス	オヤ	ウタ	エリ	ナミ
長島	アル	カク	サス	タツ	ノム	ヨム
有	書	指	立	飲	讀	
桑名	アル	カク	サス	タツ	ノム	ヨム

この表の長島を換へて東京とし、桑名を近畿にしても同じことになるやうに、この附近では東西アクセントが一線によつて割かれてゐる。服部氏は太平洋方面に於ける東西兩方言の境界線よりも、このアクセント境界線を重視して、左の如く云はれる。

甲方言を話す人が新たに之と餘程異なる乙方言を色々な實例について観察してゐると、語法的形式の方は比較的早く覺えるが、アクセントの方はもとのものが残り易い場合が随分多い様である。故に方言の混淆の際にもこの様な現象がありさうに考へられる。で私の想像する所によると、東方アクセントに屬する岐阜縣愛知縣の方言は古い時代には今よりずつと静岡縣以東の方言に近いものであつたが、室町時代まで標準語と仰がれ徳川時代に於ても江戸の言葉に對立して一つの大きい勢力であつたところの京都附近の方言及び之と多大の類似點を有する近畿地方の方言が、之に接觸する濃尾方言に、永い年月の間

に非常に大きい影響を及ぼした結果、語法上色々の點で岐阜愛知兩縣の方言が近畿方言と共通になつたのであるが、アクセントは比較的影響を受けることが少く今日の如き状態を呈してゐるのであると思ふ。

東條氏の東部方言と西部方言との中間に中部方言を設けると云ふ説は、東部方言系統と西部方言系統と相反する特徴を持つ方言を一つに纏めることに於て、無理を生ずることは避けられぬ。

東部方言は東北方言と關東方言とに分たれる。

東北方言ではイがエになり、シとス、チとツとを混ざることが有名である。又語頭以外のカ行タ行を濁音化して、月はツギ、的はマドと發音し、すべて本來の濁音のまへには鼻音を挿入するか、その前の母音を鼻音化することもこの方言の特徴である。この性質のため當方言ではマンド(窓)、マド(的)、ツンギ(繼布)とツギ(月)との區別を生ずる。ツギ(繼布)のギは鼻濁音の[gi]であり、ツギ(月)のギは鼻濁音でない[gi]である。

この音韻上の特徴は關東方言に續いて居り、特に關東北部の栃木・茨城・千葉の三縣に於て著しい。東京附近もしくは神奈川縣には今日之を見ないが、江戸時代には東京附近にもこの現象があつたやうである。

未來をあらはすに「べい」を用ふるのは關東方言の特徴とされ、昔から「關東べい」と云はれたが、これが又東北地方に多少の例外を除いて一般に行はれてゐる。

方向をあらはす助詞の「さ」も昔から「京へ筑紫に阪東さ」と云はれて、關東方言の特徴として有名になつてゐたが、今日はむしろ東北方言に於ける特徴である。

本州西部方言の中核を成すものは京阪を中心とする近畿方言で、土佐を除く四國の方言も之に似た性質を持つてゐる。

近畿と中國とでは種々の點に於て頗る違つた性質を持つて居り、殊にアクセントから云へば、中國方言は東方アクセントの系統に屬する。之を共に西部方言として一括する所以は、主としてその文法的の特質から來てゐる。

西部方言に於ける文法上の特徴はさきに述べたが、細かに觀察すればその間に存する地方的差異は相當に大きい。一般に指定の云ひ方はヂヤ、ヂヤロウであるが、近畿と北陸とではヤ、ヤロウ、ヤロと云ひ、中國でも鳥取・島根兩縣ではダ、ダロウ(ダラー、ダラとも云ふ)と云つて東部方言の形式に屬する。又否定の過去形は西部方言ではナンダであるが、中國地方でも山陰方面では伯耆以西、山陽方面では安藝以西ではナンダよりもザツタ、ダツタが廣く用ひられる。四國でも讃岐・阿波ではナンダであるが、土佐ではザツタを用ひ、伊豫ではナンダ、ザツタの兩形並び行はれる。

西部方言で特色のあるのは出雲と土佐の方言である。

出雲地方はイトウトが中舌母音で、スシツチが混同され、チニューギ(忠義)ギニューク(牛肉)の如き拗音がチーギ、ギーニタのやうに直音になることやセガシエとなり、ハ行の唇音の存在することなど、東北方言に似た處がある。アクセントも亦東北地方と相通する性質がある。これは古い日本語の性質を今日に留めてゐる。

る爲で、東北とこの地方との間にあつた地方が京都語の勢力に感化され、つゞいて關東方言の影響で遮断されたものであらう。

土佐の方言はジヂ、ズヅを嚴重に區別することと有名であるが、ダ行ガ行の濁音の前に鼻音があらはれることは、東北方言に似たものがある。アクセントもその西南部は東部アクセントに屬する。

九州方言は室町時代以前に於ては本州西部方言との間に大きい溝が無かつたが、室町時代に於ける言語の變動期に、中央の改新の波が及ぶことの緩慢であつた爲に、現代に於ては他の西部方言に對して特殊の地位を日本の方言區劃の上に占めるやうになつたものである。例へばジヂズヅの區別が江戸時代の初に江戸や近畿では消滅し、今日は本州一般に區別しなくなつてゐるのに、九州ではこの區別を残してゐる地域が相當に大きい。又本州では二段活用が一段活用化してゐるのに、九州では下二段活用は終止形が連體形と同形になつてゐるだけで、活用は古代語の姿を保存して居り、上二段活用も地域によつてはもとの二段活用の倣をとめて居り、奈行變格も古代語に近い形が残つてゐる。

その外この方言の特徴であるものは、エイと云ふ音連結を長母音化せず*ei*と發音すること、エ列音をイ列音に轉じて代名詞の「これ」「それ」「あれ」等を「こり」「そり」「あり」と云ひ、動詞の連用形につく助詞の「て」「で」をチ、ヂとすること（「着て」をキチ、「剃いで」をハイヂ）、オ列音をウ列音に轉じて燈籠をツロ、涎をユダリと云ふこと、ラ行音とダ行音を混合して、亂暴をダンボー「どうした」をローンダ

と云ふことなどは、この方言に於ける音韻上の特徴である。語法ではさきに述べた二段活用の存続の外に、上二段が地方によつて「起ける」「落てる」など一段になつたり、「起きらん」の様にラ行四段になつたりする。一段活用も「見らん」のやうにラ行四段に多く用ひられる。形容詞の語尾に「善か」「甘か」「無か」のやうなカリ活用形容動詞に似た形のあることはよく人の知る所である。助詞の「の」が主語に用ひられることが尙多く、「こそ」や「ばし」なども残つてゐる。アクセントから云へば、九州の東北部地方に東部アクセント、西南部地方は西方アクセントに屬することが平山輝男氏により明かにされた。

この方言が遠く東北方言に似てゐる幾つの特徴を示してゐるのは、これも言語が他の地方で變化したのに對して、兩方言が古い時代の日本語の性質を残してゐる爲である。シエ、ジエの音のあること、マワ、ダワの音のあることなどは、音韻上に於て兩方言に通ずる特徴である。母音の連結の*ai*が融合して*e*になることは、東北方言の北部に見られる性質であるが、これが九州南部鹿児島にも見られ、ダイユンはデユンと云ふ。方向を指す動詞に東北地方にサがあり、「様」から出たものであるが、九州にもサミヤ・サメ・シャン等がある。「をば」と云ふ助詞がバとなつて「花ば摘む」と東北でいふが、これも九州で同様にあらはれる。東北でバテといふ接續助詞があるが、之に對するものが九州で有名なバツテンである。

琉球方言は鹿児島縣の大島郡(奄美大島諸島)と琉球諸島とに行はれてゐる方言である。地域によつて方言的差異が甚だしく、伊波普 氏は沖繩・宮古・八重山・大島・徳之島・鬼界・沖之永良部の七方言があると

云はれる。この島の存在は奈良朝に於て認められてゐたが、長くわが國の勢力の及ばなかつた處で、尙氏が琉球王國を立て、から日本と明とに交通してゐた。江戸時代の始に島津氏に征服されてその領土となつたが、なほ王國と稱した。明治以後沖繩縣となつた。琉球語は内地人が聞いても理解ができないほどわれ／＼の言語と違つてゐるが、音韻や語法上の特徴などに於て日本語と一致する所が多いから、日本語と系統的關係のあることには疑がない。たゞその關係が如何であるかは未だ學者の間に説の一致がなく、はじめてこの言語を研究して日本語と同系語であることを確めたチエンバレンは、スペイン語とイタリヤ或はスペイン語とフランス語との關係に似たものとし、同一祖語から分れて一方は本土にとゞまつて日本語となり、一方は琉球諸島に於て琉球語になつたと考へた。安藤正次氏は日本語が形成されてからあとで、琉球語が分れたのだとした。日本内地方言と同系である上に琉球が沖繩縣となつてゐるから、之を日本の方言として取扱ふのは至當であるが、有史以來本土の方言とは分れて長く獨立の發達をしてゐたものであるから、言語としての取扱も内地一般の方言に對するものとは違はなければならぬ。

三 標準語

前項に述べるやうにわが國には種々の方言があるが、これらの方言がすなはち日本語であつて、國語と云つても方言の外に國語があるのではない。昔の人の考へたやうに、國語が訛つて方言が出来たのではないことは云ふまでもなく、一つの國語が擴つて擴布の地域が異なるに従ひ、それ／＼特徴のある相違を呈したものと

が方言である。東京の言語も一つの方言であり、青森の言語も一つの方言である。然し前に云つたやうに言語と云ふものは人と人とがその考へてゐることを互に通じ合ふ爲に約束によつて定められた記號であるから、その約束がいろ／＼の集團同士であまりまち／＼になり、互に理解できないやうになつたら、一個の統一體としての日本の社會は存在しないことになる。言語の統一は精神の統一である。言語の統一がなければ國民精神の統一はできない。そこで何處でも文化の進んでゐる國家では、全國民の従ふべき標準と認められる言語を作る。之を標準語と云ふ。

どこの國でも文化が向上し交通が發達すれば、共通語が發生する。地方集團が少數の人により局部的に話される言語を持つて、時代の文化から孤立して山の中などに存在したやうな場合もあつたが、今日はそのやうなことは出来ない。

どんな寒村でもその地方の中心地と多少なりと交渉があり、この地方の中心がまた中央の都市との間に密接な聯關を持つてゐる。官憲との交渉があり、壯丁は軍隊に入らなければならぬ。商業工業金融等あらゆる社會的活動が地方的ではあり得なくなつた。すべての交渉が全國的になり、方言でできる仕事にも共通語を強制してゐる。工業も振はず、商人が小さい組織の中で地方的の小賣商及び地方的の顧客に話しかけてゐた時代には、共通語を必須のものとしなかつたが、今日は時勢がかはつて大商業が生活の根本的條件であり、一工場に各地から吸收する勞働者が昔の大都市の市民より多いものさへある。

すんだ國にはどこにも共通語がある。この共通語となるものは、その國の文化の中心であり、政治經濟の中心である土地の言語であることが多い。ギリシャの昔に於ては方々の都市がそれぞれ各自の法律と權力を持つてゐて、同時に方言も皆違つてゐたが、その都市國家がアレキサンダーやその後繼者の下に、ギリシヤと云ふ國家的統一を得るやうになると、政治文化の中心であるアテネのあつたアツチカ方言がイオニア方言の語彙を加へて共通語になり、コイネと云ふ言語を發達させた。又イタリアに於てはラテン語はもとラティムの一方言、むしろローマ市の方言に過ぎないもので、他の地方にはそれと違つた言語を話してゐた。その中にはオスカン、ウンヴリアン、エトラスカン、ギリシア語などがある。然るにローマがイタリアを統一するに及んで、ラテン語がイタリアの共通語となり、遂にヨーロッパ並にアフリカの大部分に擴るやうになつた。

標準語は共通語の上に定められるべきものであり、又これまで他の國で標準語の基礎となつたものはいづれも皆共通語であつた。さればと云つてこの共通語が言語として他の方言より優れてゐると云ふのではない。東京語が現にわが國の標準語になつてゐるが、その一々の言葉遣についていへば、もつと優れた表現法をもつてゐる方言もあらうし、優美な發音を持つてゐる方言もある。それならば各地の方言を調査してその優れた處を集めて、言語として最もよく機能を發揮するやうな言語を作ればよいと考へる人もあるかも知れないが、それは言語といふものゝ性質を知らない人のいふことである。言語は長い傳説の結果、社會に自ら發達

するもので、それを人が物心ついてから周圍の人の眞似をし反復習熟して自然におぼえる者であるから、人が急に考案して何人も之まで語つたことのないものを作り出したとて、かゝる人工的なものが社會に通用する如きことは有り得べき事ではない。標準語たるものは實際にどこかで話されてゐて、他を感化するに足るだけの魅力を具へてゐる言語でなければならない。東京は皇城の地であり、政治文化經濟の中心であり、國家の活動の源泉である。東京語はこゝに長い傳統が生み出したもので、現に生々と語られて潑刺たる生命力を具へてゐる言語である。地方にはそれと生々と活動してゐる方言がある。之を感化し、之を制御して行けるものはこの魅力のある實在の言語を措いて他に求めることは出来ない。

どこの國でも共通語となつたものは大都市の言語であるが、しかしそれが共通語となるためには、極度に都市の方言の特色を振ひ落して、どこの言語か分らぬまでに角が取れて、地方色のないものとならなければならなかつたやうである。標準英語の成立について、ワイルドは「いかなる種類の言語でも、その後の歴史はどうあつても、初は地方的の定位地を有してゐたに相違ない。(中略)それでロンドン語、或はその一典型、例へば十四世紀に存在してゐたやうなものが文學的英語の祖先であり、又現代の認容されてゐる標準語の祖先である」(近代英口語史)と云ひ、イエスベルセンは「標準語の發達したのは何處を措いてもロンドンに於てであつた。然し標準語はロンドン語ではなかつた」(言語學的視點よりの人類國民及び個人)と云ふやうな違つた見解の出るのも、共通語の成長の何物であるかが分り、方言の特徴を極度に振ひ落した結果、標準語の出来る次

第も容易に想像できるであらう。

今日わが國に於ても標準語は東京語の上に成長しつゝある。これも決して純粹に東京人によつて作られたものと云ふことが出来ない。武藏野の真中に江戸が出現して、土着の人に比べてはその數の夥しい地方人を吸収して、江戸語を育て上げたあとを承けて、今日は東京語の上に標準語を作りつゝあるが、明治以降昭和の十數年間にどの位この言語が多くの變容を蒙つたか分らない。われ／＼が子供のころに聞いてゐた東京語を思ひ出すと、今日の東京語とは相當に大きいちがひを發見する。自分の子供のころには東京の中流の大人の第一人稱の代名詞はワタクシよりもむしろアタクシの方が普通であつたが、今日はアタクシと云ふ語はもう聞かないやうである。今オカミサンと云ふよりも少し良い階級の婦人にゴシンゾサン・ゴシンサンといふ語を使つてゐたが、今はこの語も無いやうだ。發音でいへば新宿はシンジクと云つてシンジュクといふ人は純粹の東京生れの人になかつたやうだ。シユ、ジュをシ、ジとするのは江戸以來の習慣らしく、三馬の浮世風呂にヒヤクニンシ(百人一首)テイシ(亭主)コドモシ(子供衆)など記してゐる。ところが今日は新宿はシンジュクといふ人が多いやうである。今日アキハバラ、タカダノババと云ふが前にはアキハノハラ、タカタノババと云つた。南瓜と唐茄子は同じものだと今日の東京人なら思つてゐる人が多からうが、明治二十二年刊の齋藤綠雨の「小説八宗」には「いづれ煮(似)たもの—南瓜と唐茄子」とあるのを見ると、當時は似てはゐるが別の物を指してゐたものらしい。これも江戸以來の例で三馬の浮世床二編卷之下(文化九年序)に

「イヤさう云ひなさんな。そこが色と戀との差別だよ、女郎のが色事、地着のが戀路といふ物だ。色戀と一緒に云ふけれど、色と戀とは菖蒲と杜若ス。」(中略)「蕃南瓜と東埔塞程違ふのは、新田の兄の色戀か」
洒落本「富賀川拜見」(天明二年)に

とうなすにこやししても、かぼちやになつたためしはねへ
とあるのを考へれば當時も別物をさしてゐたことが分る。東京はますます膨脹する。純粹の東京人は他からこゝに集中した人口に比べてたゞ數は甚だ少いものであらう。東京語が變つてゆくのに不思議はない。イエスベルセンがアテネの共通語は純粹のアツチカ語ではなく、コーペンハーゲンの共通語は純粹のコーペンハーゲン語ではなく、ロンドンの共通語は純粹のロンドン語ではなく、パリに發達したフランス語は嚴密なる意味に於けるパリ語ではないと云ふ言語學的パラドックスを生ずると云つてゐるのは、この間の消息を語つてゐる。

この共通語の成長には一般的教養の普及が與つて力があるが、文學の影響の大きいことはどの國でも注意されてゐる。英國ではチョーサーが之を用ふることに由つて、その勢力が大きいものになつた。殊にドイツの如き標準語が文語として成立つたところに於ては、文學の影響は一層決定的であつた。もとドイツに於ては、パリやロンドンに比較されるやうな政治の中心はなかつた。ベルリンが首府となつたのは歴史上最近のことに屬する。ドイツ標準語が成立つたのは、ドイツ人が東方に植民して多くの都市を建てた時に起り、

ザクセン語が文語として採用されてそれがルーテルによつて聖書の翻譯に用ひられた爲である。

わが標準語は口語文普及以來、文藝用語となつていよ／＼勢力を加へた。口語を文藝用語に引上げた功勞者は、文藝作家であつたと共に、之を洗練し、統一しその普及に貢獻する所絶大なものも文藝作家である。標準語が國語の代表者となり、全国的に強制力を持つためには、十分われ／＼の氣持をよく人に傳へ得る言語でなければならぬ。よく整頓されて深い思想、正確な論理を運び得る言葉であり、細い感情の陰影を傳へ得るやうな表現力に富んだ言葉でなければならぬ。この點に於て今日文藝が標準語の普及に力があり、文藝が標準語の彫琢に貢獻してゐることは何人も疑はない所である。國語教育が確立し標準語が整頓し普及して居ることは、優秀な國民文學の生れる所以であり、優秀な文學の生れることは標準語を完成せしめる所以である。

標準語が出来ても方言が亡びてしまふことは出来ない。地方集團がある限り、各地はそれぞれ局部的な語彙や文法があることは止むを得ない。各地の人が互に語り合ふ場合には、その地の方言でなければ自分のこまかい心持を思ふやうに表現し得ないと云ふことはあり得るものである。それ故に彼ら同士が方言を語ることは差支がない。然し標準語を知らなければ人の活動はそれだけ不利益である。東北地方の人が東京に出て活動の鈍るのは、標準語を十分つかひ得ない爲であるといふことをこの地方の人の口からしば／＼洩されてゐる。今日の人はその自然の必要から、標準語を習得するやうになる。

はじめは標準語と方言と二語併用の状態を現出する。標準語を知つてゐるものはそれだけ特權を享受するやうになるから進んで標準語を用ひるやうになり、標準語を持つてゐることを以て自分の優越を示すやうになる。標準語をつかふ階級を優等視して少しでも之に近づき之を模倣する。従つて各地の人々の方言は標準語の語彙や文法を取りこんで、方言は標準語の不完全な模寫にすぎなくなる。

封建時代にはどこでも方言が割據してゐた。これは當時の社會的事情の然らしめた所であり、今日は方言がだん／＼と消滅する。これも今日の社會的情勢の結果である。今日は片田舎の若いもの、言葉と老年の人の言葉との間に大きい隔ができて來た。それは世代の差と云ふよりも標準語の浸潤の爲である方が多い。方言はかくして自ら時を追うて亡び、同時に標準語の習得も容易くなるのが當然であるが、國家は之を自然に任せるべきでなく、今日以上に全國民が標準語を話し、標準語を書くことのできるやうに國語教育の徹底を期し、國民が國家的に活動できるやうにし、又之を日本語として海外に進出せしめ得るやう、統一した標準語を作らなければならない。

國家としては規範としての日本語、強制力のある日本語で異民族にも採つて持つて教へ得る一個の日本語を持つてゐなければならぬ。東京の中流社會の人が持つてゐる言語が標準語であると云つても、東京の個々人が用ひてゐる言語が標準語であると云はれないことは云ふまでもない。東京人の言語をとつても、その具體的の云ひ方はみなまち／＼である。東京人でも生れてから自然におぼえた言葉を以て標準語とは云はれ

ないことは誰も知つてゐる。國家としてはこれが即ち日本語であると云へる口語を持つて居り、之を文語にも用ひるやうにしなければならぬ。文藝もこの一定した口語の上に出てはじめて日本の文藝と云ひ得る。語彙が亂雑であり、文法が不統一な言語の上に作り出される文學では、これが日本の文學であると世界に誇り得るものでない。

平安朝の昔に於ては、物語草子に記されてゐる言語が比較的整頓され統一されてゐるやうに感ぜられる。文法の上だけで云つても、江戸時代の文獻から江戸時代の文法を記述して見ようとしてその複雑に驚くことから考へても、平安朝の文法が比較的明晰であつたやうにおもはれる。これは平安朝の宮廷と云ふ狭い社會に育つた言語であり、人々相互の交渉が密接であつたからであらうが、その優雅な生活の間に統一された言語が戀の贈答の間に洗練されてあの假名文學が用れ、つひに源氏物語のやうな大作も出たものであらう。言語が統一され洗練されてゐたから誇るべき文學も生れ、また偉大な文學があらはれたから言語の規範も出来たと云ひ得る。今日は標準語の上に文學が成長しつゝあるが、今日の如き口語ではそのまゝ文學の言語とするには満足できないものがある。それを補ふために、長い生命をもつてゐたこれまでの文語が新しい文語の發生に協力してゐる。しかしその間の間隙があまり大きいために、どうしても口にかたる口語と文章に記す口語とは離れたものにならざるを得ない。これが標準語を作つてゆく上の非常な妨である。もつと口にかたる口語と文語とが近いものになり、口語が彫琢されて直ちに文學用語となつたならば、之が方言を感化し、標

準語を確立する上に大きい力となることは疑はれない。又この標準語が確立されば、それがやゝもすれば頼れんとする方言をひきとめ、日本語の傳統を維持する力も大きい。言語は變化し分裂するのが常態であるが、統一された標準語の上に文語が発生し、文學をはじめあらゆる著作が之を以て記され、之が學校教育に由て普及されたならば、規格の定まつた立派な日本語は文化の向上に裨益する所大なるものがあらう。

四 言語地理學

火箸といふ一語も假名で書けば全國ヒバンで變つたことがないが、そのヒは東京では[ci]、關西では[hi]であり、東北地方では[fi]である。そのiも實は東北方言では中舌母音であり、又rのまへで鼻音化するからこのヒは[fi]と現すのが正しい。シもまた東北方言ではシとスとの中間音で[si]である。

かく同じ國語のヒバンも各方言で種々の種類があるわけだから、國語を研究すると云へば各方言に互つての研究でなければならぬ。こゝに特に方言學と云ふものが要請される理由がある。地方の方言の如きものはこれまでどの國でも顧みる所とならなかつたが、西洋で近世の言語學が起つてから注意されるやうになり、グリムがラスクのアイスランド文法を批評した中に「それ〴〵個性といふものは言語界に於ても尊いものとして敬はなければならぬ。どんな小さいつまらない方言でも、各自の性質ありのまゝに置いて他から餘計な手を加へる様なことをせず、その個性を尊重するのは望ましいことである。何故ならば斯かる方言こそ、勢力あり人に重んぜられる言語以上にすぐれた便宜をきつと隠しもつてゐるからである。」(市河神保兩氏

譯イェスベルセン「言語」の引用と云つたのが方言研究の端緒を成したものであると云はれる。その後歐洲では追々方言の研究が起つたが、多くの研究も之を方言學と名づくるに値するものはなかつた。唯近年ジリエロンの手により言語地理學と稱するものが組織されたことは、この方面に於ける注目すべき事實である。

言語地理學はジリエロンに始ると云はれる。この人以前にも之に類する研究はあり、現にジリエロンはその研究法を師のカストン・パリヌに仰いだもので、パリヌはドイツのウエンケルの研究に負ふ所があるが、今日言語地理學の祖をジリエロンとするほど、彼の方法はそれ以前の方言研究に独自の境地を拓いたものであつた。

言語地理學は植物地理學とか動物地理學とか云はれるものと同様に、言語の地理的分布の研究に端を發してゐるが、單に方言の分布状態を究めるばかりでなく、之を通して言語の發生成長衰滅を研究することを目的としてゐる。

言語地理學はジリエロンが作つた「フランス言語圖卷」から生れた。ジリエロンは助手エドモンを備つた。この人は方言をきゝとる上に耳の確かな人で、またよく田舎の人々の心理を識つてゐたから、この調査には最もよい條件を具へてゐた。ジリエロンが豫め選んでおいた主要な語彙や言語形態文章法事項を含む約二千の常用語句の書いてある質問書を携へて、エドモンは一八九七年から一九〇一年に亙る四年間にフランス國中を遍歴し、六三八の地點で、その土地の者で最も適當な人物と思はれる男或は女を選んで、質問書に掲載さ

れた語と文を全部その土地の言葉に口譯して貰ひ、簡単な音聲記號で書取つて送つた。ジリエロンはその採集語について一枚づゝの地圖を作つた。例へば「蜜蜂」と云ふ語について云へば、地圖の上に六三八の地點に番號が附けられてゐるから、「蜜蜂」と云ふ語が各地點に於てどのやうに云はれるか、各方言に於ける語形が地點の番號に並んで音聲記號で記されて一枚の地圖になる。かゝる地圖二千葉が集つて十二卷となつた。單に言語地圖といふだけならばジリエロンの獨創ではない。その特色とする所は言語地圖の材料の處理法にあつて、一つの單語一つの言語形態一つの短文に夫々一枚づゝの地圖が充當されてゐることである。從來言語地圖と云へば、それは即ち音韻乃至は形態論的分布圖のことであると解されて居り、著者はその恐らく恣意的な區分の據處としてゐる諸形を一々精密に擧げることなく地圖を描いてゐた。フランス言語圖卷の著者の採用した方法は、言語上の複雑な事實を相互に多かれ少かれ密接な關聯に於て一目の下に綜覽することを得しめるものであつて、之に由つてこれまで以上の精密度を以て言語進化を説明すべき新しい方法が生れ出たのである。

そも／＼言語は極めて複雑な社會的事實であつて、純理論的に論理學や文法理論を適用して説明するだけでは、往々その真相を捉へ得ざるものであることを認め、現在あるがままの言語事實を忠實に記録し、生きた言語機構のうちに科學的保證のある理法を見出さむとすることが言語地理學者の本領とする所である。言語の形態は論理の支配を受けるものでなくて、むしろ無意識に機械的にはたらく聯想作用の影響を受けるも

のであることを見出した如き、シリエロンの着眼の凡ならざるを示すものである。

西洋の言語研究は十九世紀に異常な進歩を示し、比較言語學として一面に輝かしい業績を残したが、あまりに抽象的で無限に複雑な言語事實を論證に裏付けされない理論で片付け去つた憾がないではなかつた。この點に於てシリエロンは鋭い直観によつて、機に應じて變通する柔軟性のある研究法により、回歸(Regression)及び間違つた回歸(Fausse régression) 同音衝突(Collision homonymique) 及び同音索引(Attraction homonymique) 癒着(Agglutination) 及び切斷(Déglutination)その他の諸現象を闡明して、この新しい學問の基礎を築いた。

言語地理學は語を一々の地點に捉へ、自然の環境の中にその起源を研究する。語は自己の地理的條件を有し、この條件を明かにすることに由り、其の歴史も明かになる。ある地點では明確な語源が他の地點では掩はれてゐることがある。語の空間に於ける分布を解釋し、語の時代を追うて生起し死没した關係を決定して、それらの成立を再構しようとする。この意味に於て言語地理學は言語地質學となり言語層位學となる。地質學が岩石の含む示準化石や、地層堆積の斷絶を調査して、地球の過去の時代に於ける歴史を地殼の露出部、すなはちいはゆる露頭(Affleurement)に由つて解釋するやうに、言語の過去の諸時代の歴史を現在の單語の分布状態によつて明かにしようとする。

フランス言語圖卷中の牝馬の地圖は三箇の主要地區の存在を示してゐる。一は *oza* 地區で、中央高原では多

少纏つた地域を占めてゐるが、南部及アルプス地方では散在する數個の言語島を成してゐる。二は *cavale* 地區である。これは南部地方全體を覆ひ北部イタリアにまで及んでゐる。三は *jument* 地區で、三地區中最大なものである。北部中部全體に擴り、又方々に言語島を持つてゐる。これらの語の層位を定める爲には言語史的事實に助を求める。十三世紀では牝馬は北部地方では *oza*、南部地方では *oza* と呼ばれてゐた。そして又 *jument* と云ふ語は當時フランス全體に互つて荷積馬と云ふ意味だけに用ひられて居り、又 *cavale* と云ふ語は、中世紀末にアルプス山脈を超えてフランスに這入つて來たイタリア語であつたことを教へて呉れる。又 *jument* が荷積馬と云ふ古い意味から牝馬といふ現代の意味に變つたのは、最北部地方に始ることは牝馬が當時北部地方に於て専ら荷積馬として使用されてゐたからである。其の後段々に巴里地方に侵入して來て、當時その發音が餘り短かすぎた爲に力を失つてゐた古語の *ive* を完全に抹殺したものであることが分かるから、南部地區の *oza* が最も古い地區で第一紀層に屬する。この語はどこに於ても後退して居り、中世以來その地歩を失ひつけてゐる。次に *cavale* がイタリアから來て、南部及びリオネ地方に擴り、そこから一方低部オーベルニュ地方に、他方ワロン地方に擴つた。最後に現在の意味を持つ *jument* が巴里に到達した以後は、この語が廣い領域に放出された。

かくの如く地區の連續とそこに比較的の新古の年次をみとめ、又各方言の間に存する連帶關係を認めるならば、その反面に語の移動といふことを考へなければならぬ。言語地理學に於て之を語の旅行と云ふ。語

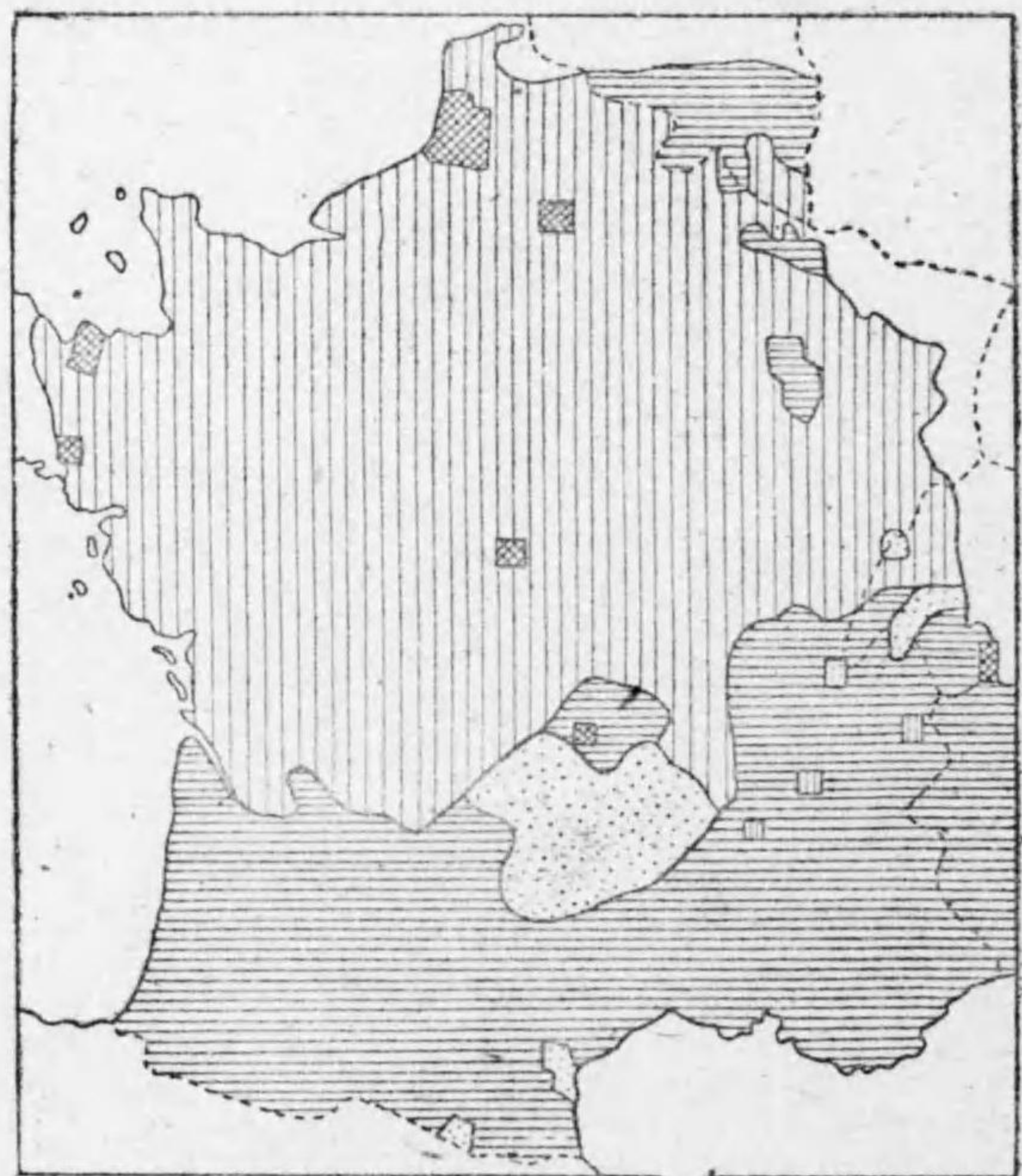
の旅行は周知の事實であるが、語は無軌道に旅行するものでなく、旅行には一定の筋道がある。嘗て民族が侵入したり、交易が行はれた地理的大往還を辿り谷を遡り山を迂回して行く。フランスの大動脈はソーヌ河及びローヌ河の廣い沿岸路で、二千年來北部フランス語が南部フランス語から借用した無数の語は皆この道を遡つたものであり、今日は反對に巴里の新語がこの道を通つて地中海岸に行く。この移動は平穩で旅行と稱し得べきものもあるが、又手荒くして移住とか侵入とか云はなければならぬ場合もある。

言語地理學の最も大きな特色は人間生活のうちに言語を捉へたことで、語彙形態すべて個々の人間と同じく土地に結び附いてゐるもので、語が旅行し、移住し、争闘すること、丁度社會生活を營む個人と同様であることを明かにした。

移動の間に語彙が或は同音衝突を生じ、民衆語源により歪曲し、何らかの缺陷のゆゑに消滅する等種々の異變を経験することも、或は健康で強力であつた爲に多くの家族を擁してその子孫を増殖することも人間生活と同じと考へる。損傷された場合には又言語は自然に之を治療し、その缺陷を補填することもある。この云はゞ語の病理と治療、生誕と死滅とを研究の對象とする場合に、言語地理學は言語病理學、言語治療學となる。

ジリエロンは極めて獨創的な人である。従つてその研究は斬新で示唆に富む。凡ての既成觀念を排斥し、嚴密な推理に由て事實を解釋し、假説を立て理法を捉へて行くことに於て方言學は眞の内容あるものとなり

言語研究に新生面が開けた。ただその缺點はあまりに自由で想像の多いことである。素人藝を樂しみ論理を弄んで空想に陥る弊は戒めなければならぬ。



北馬が ega と呼ばれる地方
 同 cavala, cavale 同
 同 jument 同
 近代造語その他種々

第九圖

第九章 系統論

以上音韻文法語彙等言語一般の性質から國語を観察し、文献の示すところに由り古代に遡りその歴史的變遷をも略述したのであるが、その基本の性質は國語の成立したときに始り、連綿として長い世代に於て變らず持續されて、各時代に外來的要素の加つたことも多いが、それが基礎たる國語の中に攝取されて、今日の國語の渾然たる體系は出來上つてゐる。

世界には多くの言語がある。言語學者は世界の言語をその形態的特徴により種々の類型に類別する。これを言語形態分類 (Morphological classification) と云つてゐる。勿論多くの言語は種々の形態的要素を分有して、之を少數の類型に類別し盡すことのできないことが定説となつてゐるけれども、或程度までは主要な特徴の上に形態上の類別を果し得てゐることは疑はれない。わが國語はこの形態的分類の上から見れば如何なる種類の言語と云ふべきか。又國語は日本民族の成立と共に成立つたものであるが、日本民族は悠久の昔にどこからかこの國土に渡つて來たものに違ひない。日本民族がこの國土に來た後、日本語を作り出したものでないならば、わが國に隣接した地域に語られてゐる言語と何らかの關係のあるものと云はなければなら

なす。世界には澤山の言語があるが、その系統によつて類別するときは、之を言語の系統的分類 (Genealogical classification) と云ふ。わが國語はどここの言語と親近關係があるか。

世界の言語は形態的には左の四種とされる。

一 孤立語 (Isolating language) 語は文法的關係によつて何ら形を變へず、それがその場合場合に果す職能はその文に於ける語序即ち語の排列の順序によつて定まるもの。語は互に孤立してゐると云ふのである。支那語の「我愛你」(wo ai ni)「你愛我」(ni ai wo)の如き例である。支那語やその附近の同じ系統に屬する西藏語、ビルマ諸語、タイ諸語が之に屬するが、この形態の明瞭なものは支那語である。

二 膠着語 (Agglutinative language) 文法的關係が接辭 (國語ならば辭) によつて示されるもの。接辭は獨立の語でなく、常に他に從屬するが、同時に語幹に融合することなく、いつでも之を取はずることが自在なものである。ウラルアルタイ語族の諸語が之に屬する。例へばトルコ語で sev は「愛する」と云ふ意味をあらはす動詞で、之に nek をつけると不定法となり、之から色々な意味が接辭を附けることに由つて現される。「愛する」は sev-me-nek 「愛する」は sev-dir-nek 「愛される」は sev-il-nek 「愛し合はせる」は sev-ish-dir-nek 「愛し合はしめられる」は sev-ish-dir-il-nek 「愛され得る」は sev-il-me-nek で「愛され得る」は sev-il-dir-eme-nek といふやうになる。同様に名詞も ev は家、その複数が ev-ler 「家から」は ev-den、複數の家ならば ev-ler-den。この文法的手續はよく日本語に似てゐる。

三 屈折語 (Inflectional language) 文法的關係をあらはす成分が語幹に融合して分つべからざるものとなり、且語幹それ自身内部に變化を生じて、種々の文法上の職能を示すものである。印歐語やハミト、セム語族の諸語はこれである。例へばラテン語で dominus (主人)と云へばその形自體がすでに單數であり、主格であり、男性をあらはす。意義素と形態素は分つことが出来ない。それだから文法的關係が變ればまた形が變り、呼格 domine 對格 dominum 屬格 domini 與格 domino 奪格 domino と云ふやうになる。語形の内部變化と云へば、例へば英語の foot-feet, sing-sang-sung の如き形に見られる。動詞もラテン語に於て「愛する」は amo であるが、すべての「愛する」ことを指すのではなくて、これは「私が愛する」ことを意味し、「汝が愛する」は amas、「彼が愛する」は amat と云はなければならぬ。

四 抱合語 (Incorporating language) ラテン語などは動詞の語尾に一人稱二人稱三人稱等の區別があるが、それは主格に關するものだけで、目的格關係の人称の區別は示されない。然るに抱合語と云ふものはそれまでが一つの動詞の語形に由て示されるから、一語にして一文の觀を呈するやうになる。例へばメキシコ語の如きものがそれで、「食ふ」は ka と云ひ、「私がそれを食ふ」は ni-ka、「私が肉を食ふ」は ni-naka-ka と云ふ。「私」「其れ」「肉」は獨立に使ふ時は newatl, jewatl, nakatl であつて、ka に結びつく時、膠着もしくは屈折のやうな形をとり、しかもそれが一の動詞でなく、一箇の文の價値を持つものである。

世界の言語を系統的に類別すれば

- 一 インドヨーロッパ語族、インドゲルマン語族 アリアン語族とも云はれる。東は印度の言語からベルシア、ギリシア、ラテン諸語を経て、西はヨーロッパの最西端アイスランドの言語に及ぶ一大語族である。
- 二 ハミト・セム語族 アフリカ大陸の北部及び西アジアの諸地域に話されてゐる諸言語で、エジプト語ベルベル語クシ語等ハム語族とフェニキア語アラマイ語ヘブライ語アラビア語エチオピア語等のセム語族を含む。
- 三 ウラル・アルタイ語族 フィノ・ウグリア語族及びサモエード語を含むウラル語族とトルコ語蒙古語ツングース語等アルタイ語族との間に系統的關係ありと考へて立てられる語族である。
- 四 ドラビダ語族 西南インド、セイロン島北部及び東ベルチスタンの一部に話される言語である。
- 五 印度支那語族 西藏諸語ビルマ諸語支那語タイ諸語苗族語等を含む。
- 六 オストロ・アジア語族 (Austro-Asiatic Family) 印度支那半島東部の安南語、同じく南部のカンボヂヤ及びビルマのサルキン川流域に話されるモンクメール語、ヒマラヤ山の南麓印度中央州その他に散在するムンダ語を含む。
- 七 オストロネシア語族 (Austronesian Family) マレー、ポリネシア語族 (Malayo-Polynesian Family) とも云ふ。印度洋及び南太平洋に散布する諸島嶼の言語で、東はマダガスカル島から西はチリに近い復活

祭島に及ぶ。之にインドネシア、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアの四派がある。

八 アフリカ土人語 バンツ語族、スーダン諸語その他ホットtentott、ブッシュメンの言語があるが、その系統的關係の有無については定説がない。

九 アメリカ土人語 多くの言語があるが、系統的關係は全く不明である。

國語は形態的に見て膠着語であると云はれる。これは大體に於て當つてゐる。助詞助動詞の類が體言や動詞の下について文法上の關係を示し、それが觀念語に結びついて種々の職能をあらはすが、大抵はそれと融合しないで、比較的獨立を保つてゐることは膠着語たる特性を示して居ると云つてよい。然しまへに述べたやうに(第五章第二節及び第四節參照)、動詞の活用は或種類の動詞に於ては之を膠着と云へるが、母音變化を原則とする動詞がある。「行く」と云ふ動詞は「行か」「行き」「行く」「行け」が語基で、それに膠着によつて各種の助動詞や助詞が結びつく。その共通成分 *yuk* は分析すれば語幹と云はれるが、國語は常に開音節から成るものであるから、*yuk* が獨立して語基とはなれない。*yuka yuki yuku yuke* が動詞で、*yuk* だけで動詞ではない。それゆゑに語基の中に於て母音が變るものとして自分は之を語基構成用母音の變化と云つた。かゝる事實から云へば國語は必ずしも膠着語とばかりは云はれない。二段活用に於ても「る」「れ」を添加することは膠着と云へるが同じく母音變化の原則を併用する。

滿洲語で *ara* は「書く」と云ふ動詞で、命令形ではそのまゝ *ara* で「書け」の意味であるが、種々の時

をあらはすには現在は *arambi* 過去は *araha* (書いた)、未來は *arara* (書かう)と云ふやうに、助動詞が唯膠着の手續でつくだけであり、蒙古語でも「眠る」は *onta* で、之に種々の助動詞がつく。現在であれば *ontanoi*、過去は *onta-ba*、未來は *onta-yu*。その他受身で「寝かされる」は *ontah*、「寝させる」は *ontayolhu* と云ふやうに、動詞語形内部に變化は更に起らない。この意味から云ふと、同じ膠着語といはれても滿洲語や蒙古語の方が徹底してゐる。

日本語を膠着語のうちに列せしめると云つても、それは大體上のことで、嚴密な意味に於て文法的關係が膠着を以て現れると云ふことは出来ない。屈折語と云はれるものにも膠着語の要素はあり、同じやうに、日本語が膠着語であると云つても、純粹に膠着の手續ばかりで形態ができるやうなわけではない。

系統的分類から云へば日本語はウラルアルタイ語族に屬すると云ふ説がある。

はじめに日本語のウラルアルタイ語族に屬することを唱へたのはクラプロット (Klaproth) で、その後ボラー (Boller) は「日本語のウラルアルタイ所屬論證」(Nachweis das Japanische zum ural-altaischen Stamm gehört) に於てウラルアルタイ語族殊に北サモエド語に似てゐることを論じ、ロスニー (Rosny) は「日芬語同系論」(Affinité des langues finno-japonaise) に於てフィン語との系統的關係を説き、ウインタール (Winkler) に至つて「日本人とアルタイ族」(Japaner und Altaier)「ウラルアルタイ語族論」(Der uralaltaische Sprachstamm, das finnische und Japanische) 等に於て人類學言語學上から兩者の親族性を

論じてやゝ精細なるものがある。然し現代に於けるウラルアルタイ語學の權威で嘗て日本駐劄フィンランド公使であつたラムステッド氏が「かゝる見解を説明しその主張する事實を例證すべき著述は誤解も夥しく、證左も不十分な爲、吾人をして承服せしむるに足らない」と云つたことは、よくこれらの論著の弱點を指摘した言である。比較的新しく出た Sauvageot の「ウラル、アルタイ諸語の語彙研究」(Recherches sur le vocabulaire des langues ouralo-altaïques 1930)の如きものに至つても、この缺點を持つてゐることに於ては他に劣らない。

朝鮮語も往々ウラルアルタイ語族に屬する言語であると論ぜられ、多くの學者によつて之と日本語の關係が論ぜられてゐる。

朝鮮語との關係は古くからわが國の學者の注意するところとなつた。藤井貞幹は「衝口發」にはじめ日本人は朝鮮人に通譯を介せずして談話を通じたであらうから、もと同一の言語であつたらうと論じ、新井白石も「東雅に」於て多くの語彙につき朝鮮語との比較論を試みてゐるが、明治になつてアストンが「日鮮兩語比較的研究」(A Comparative Study of the Japanese and Korean Languages, 1879)に於て、音韻文法等各種の方面から之を論じ、兩語はもと大陸に於ける共同祖語から分れ、祖語はやく消滅したが一は半島にとゞまつて朝鮮語となり、一は海を渡つて日本に入り日本語の祖語となつたものであらうと論じ、その説は金澤庄三郎氏の繼ぐ所となり一層組織を得たが、今日に於ても白鳥庫吉氏の如く非同系論を強硬に主張する人もある。

ちかごろまた從來のウラルアルタイ語族系統説と別途に出て、南方の語族との關係を究めようとする論者が多く出てゐる。ポリワノフは日本語を朝鮮語とマレイ語との混合であるとし、日本語に於ける高低アクセント、「ま」と云ふ接頭辭、一部重複法の存在を以てマレイ、ポリネシア語の影響であるとした。ファン、ヒンルーペン、ラバートン氏(Van Hinlopen Labberton)も日本語のマレイ、ポリネシア語系説を唱へ、二十餘種の文法的類似を擧げてゐるが、マレイ・ポリネシア語の挿入辭(Infix)と同じものが日本語にもあるとし、「降る」(furu)に *nr-* が挿入されて「觸る」*furuuru*、それに *in-* が挿入されて *finuruuru* となり、「濡れる」(*nuru*)ができること云ふやうなことを説くに至つては信賴できない。松本信廣氏の説は語彙についての比較であるが、その選ばれたものが基本的の語彙であつて、かゝる語彙に於て通ずるものがありとすれば、單なる借用といふ意味以上に相當に深い關係の存在を示唆するものである。まだこの方面の研究は學術的境地に達して居ないことに於て、ウラルアルタイ語系説に比して甚だ遜色があり、むしろ言語學者には敬遠されてゐる傾があるが、國語の系統論闡明のためにはウラルアルタイ語との比較研究を進むる一方、南方語の研究もゆるがにせず、言語の基本的性質について比較的研究を行ふことが必要であると思ふ。日本語がウラルアルタイ語に屬するが如く屬せざるが如くあまりに漠として捉へ所のないほど日本語とかの諸語との間に距離のあるのは、ウラルアルタイ語の祖語から分れて日本の國土に發達した時期が久しく、そ

の間に大に性質の違ふ南方語の影響を受けることが少くなかつたことに由るかも分らない。新村氏が「國語系統論」に於てウラルアルタイ語族との關係を論じ、その結語の項に「兎に角日本語は早く共通言語から分出して南方語とも接觸し若干の影響を受けて來たものであらう」と云つて居られるのは、この間の消息を語られるものと解する。

今しばらく轉じて日本民族の成立について考へて見る必要がある。

人種は言語について何も教へてくれない。人種とはけだし體質上の概念で、血族性から見た人間の集團である。ゲルマン人種と云ふものがある。ブロンドの髪、細長い頭蓋、高い身長等、その特徴の顯著なものがあつたが、この特徴を持つてゐる人間が皆ゲルマン語を話してゐるとは限らない。すなはち人種が同じでも同じ言語を語るとは云へない。その反對に人種が違つてゐても同じ言語を話すことがある。それは民族的統一に由る。民族といふのは文化を同じくするもの、集團の謂である。民族的統一は文化の共通性によつて成立つもので、この統一は人種を異にし政治的統一を持たない人類の間にさへ存する。

日本の石器時代にはまづ縄文式土器文化が發達し、後には之と並んで彌生式土器文化が西部日本に發達した。縄文式土器文化を残した民族はアイヌであると云ふのは、小金井良精氏が比較解剖學上から發表された説である。モールスはアイヌの口碑に残つてゐるコロボツクルとし、坪井正五郎氏もコロボツクル説であつた。コロボツクルかアイヌかの議論が學界を賑はしたことがあるが、坪井博士の逝去と共にこの説は立消え

て、その以後は縄文式土器文化人はアイヌであると云ふ説になつた。然し比較的最近になつて人類學者の間から、石器時代の人骨の研究の結果として、石器時代人はアイヌに似たところはあるが、現在のアイヌとは同視すべからざるものとして、之をパンアイヌもしくはアイノイドと稱ける松本彦七郎氏長谷部言人氏等の説が出た。清野謙次氏は之に一步を進めて、石器時代の人類はアイヌに似たところもあるが、日本人に似たところもあり、大體に於て一種族であつてその北方のものが北方種族との混血によりアイヌ人を生じ、南方に於て南方種族との混血によつて現代日本人を生ぜしめたと云ふ説を發表された（原日本人の研究）。この説に由ればアイヌの要素は稀薄になるが、言語についてはむしろその反對に重視されて、「アイヌ人が古代文化の保持者であつたことはアイヌ語が日本石器時代語に近い關係のものであつた事を想はしめる。日本南部及び中部にアイヌ語によつて解釋し得可き地名の少なからず存在する事は之れが證據の一つであらう」（東洋思潮「日本民族四七頁」）と云つて居られる。アイヌ語と日本語との間に系統的關係があると云ふ説を唱へる人は他にもある。ツエンケル（Zenker）の如きは朝鮮語琉球語は今日こそ存しないが、嘗てあつたと思はれる共同祖語から發達した同一系統の言語であると考へた。さうしてその言語の特質はアイヌ語に最も忠實にあらはれてゐると稱し、これを簡單に言ひあらはすためにその全群をアイヌ系諸語（Ainuverwandten Sprachen）と稱けると云つて、これら諸言語の同系の言語であることを主張した（Das japanische Lautwesen im Zusammenhang mit dem Koreanischen und dem der Liu-kiu-und Ainusprache, 1926）。この論はもつぱら音

韻組織からの論であるが、アイヌ語は形態的に云へば一種の抱合語で、例へば「我與ふ」は *akore* と云ひ、「我汝に與ふ」は *ae-kore*、「我汝に澤山與ふ」は *ae-korpare* と云ふやうに、「一語にして一文の觀を呈し、日本語と甚だしく趣を異にするものである。

傳説によればわが祖先の民族と北方に於て對峙してゐた民族は蝦夷である。これと現今のアイヌとの關係如何は姑く論外におくが、これが縄文式土器文化を残した民族であることは疑はれない。考古學者によれば縄文式土器分布地域と彌生式土器分布地域との境界線は、伊勢灣に起り關ヶ原を経て若狹に終る山脈が分水嶺を成すと云はれ、之より東北は縄文式土器遺跡の分布が濃密で遺物を含む層が厚いのに、之より西南は彌生式土器遺跡の分布が濃密で層も厚いと云はれる。

彌生式土器文化人が日本民族の大宗を成すものであることも誰も疑ふものはなく、此が次第に縄文式土器文化人を同化したことは、前者が漁撈狩獵のみに由つて生活する自然經濟の民族であつたのに反し、後者が早く農耕の術を知り、やがて青銅文化の段階にまで進んだ文化的民族であつたからである。

彌生式土器の發達を見ると、もつとも古い型式は九州北部の遠賀川式で、之が伊勢灣附近でもつとも發達した櫛目文土器として現れる。受知縣以東に於ては縄文式的手法を加へてゐることは、縄文式土器文化との接觸を示してゐるが、石器時代後期に於ては櫛目文土器が全國を統一して、九州に於けるものもその影響下に在ることは、嘗て北九州から進んだ文化が中部に於て大發展を成し、その力が原動力となつて文化的にも

政治的にも全國の統一されたことを示すもので、こゝに日本の國家も成立し、日本語も成立したものと考へてよい。彌生式土器文化に地方的色彩のあることは諸方に小文化圏の存在したことを示すものであるが、それが全體として彌生式土器文化を成すことは日本語の統一を示し、中部以東に於て蝦夷基層のため、異種の言語が方言的差異の或種の原因を成すことの考へられるほか、民族の言語として今日ある如き日本語の基礎は出來てゐたものと見なければならぬ。

彌生式土器の本源は北方にあると云ふ説がある。金石併用時代の銅鐸銅劍は北方起源であると云ふのが定説である。銅鐸については異論があるが、北方起源と云ふ説もある。石器時代の人間が北方から來たものゝ多いことは事實だが、南方から來たものも少くないことは疑はれない。人種としては滿州朝鮮系のものもあり、馬來人種印度支那人種もあると云ふのが定説となつてゐる。支那人もあつたかも知れない。多くの人種が混成して彌生式土器文化人となるまでには多くの世代を経過した。従つて日本語の成立は淵源することが悠久の昔にあり、漸を追うて渾融して歴史時代の言語に移り行つたものと考へなければならぬ。

南方に起源する民族が北方系のものに劣らず日本人を成す有力な要素であつたらしいことは、今日なほ風俗習慣その他神話傳説に於て南方種族のものがわが國のものに近似するものゝ多いことを見ても察せられるし、殊にわが重要な産業たる農耕に於て稻の如きものはその起源を北方に求めることは出來ない。言語に於ては形態や文法は全く類似を南方に求めることは出來ないやうだが、之らに劣らず重要なものは音韻的性

質である。語彙はもつとも多く變る。その次に多く變化するものは文法である。音韻はもつとも多く古い言語の性質を傳へる。北方の言語に於ては母音の種類が多いが南方語は少い。マレイ語の母音は今日のわが國語にある[a][i][u][e][o]の外に[ə]があるが、重要なものではない(大東亞語學叢刊「マレイ語」宮武正道)。マイクロネシア語でもアイウエオの五母音で、ドイツ人がo üといふ音を擧げてゐるのは松岡靜雄氏によればiに通ずるもので、訛音として現れると見て居られる。音節もわが國語の特徴と同じくマイクロネシア語では閉音節で、西洋人の用ひる表記法では閉音節も存立するやうに見えるが、as. pit. の如き語は a. p. i. t. といふ二音節から成る語で、母音が脱落したものと見て居られる(松岡氏「マイクロネシア語の綜合研究」)。かゝる音韻的性質も日本語との比較には輕視できないことであらう。

然し九州に於て地歩を占めた民族に人種的に見て南方系のものがあつたとしても、それが強力な民族として發達するやうになつたのは、北方大陸の文化を吸収して優越な文化の段階に上つた結果であつたと考へないわけにいかない。いつの時代にも北九州は文化の發祥地で、彌生式土器の古型はこゝに始り、大陸から來た銅鋒も最も古い狹鋒のものはこゝから出土する。従つてこの地が有力な文化圏を成すと共に、つねに豪族の政治的勢力圏を成してゐたものらしく、その豪族の一である海神族がわが皇室の外戚であつた。神武天皇の母君玉依姬命は書紀によれば「海童の少女」とあつて海神族の女である。天皇御東征の時は海神族の力を借りられ、日向御發後古事記によれば岡水門に入られ岡田宮に一年を過された。岡水門は遠賀川河口の地で

海神國に近い。書紀に海神の宮を叙して「其宮也、雉堞整頓、臺宇玲瓏」又「城闕崇華、樓臺壯麗」とあり、その國の富強の様が察せられる。

支那は古代に於ける有數の文化國で、夏殷周を経て青銅文化を發達させ、漢の時代には鐵器文化に入つて東亞の文化母胎になつた國であり、四隣の民族がその影響の下に文化を發展せしめたことを考へると、わが國に於てもその民族が南方系の人種であつたとしても北方系の人種であつたとしても、もつとも早く朝鮮を通じてこの大陸文化を吸収して優越の地位に上つたものが統治者となつたことは疑はれない。文化の優れてゐるものゝ言語が支配的地位に上ることは、世界いづれに於てもつねに見られる事實である。滿洲族は支那を征服したが、その政治的支配にもかゝらず滿洲人は言語に於て支那に同化された。文化の優れてゐるものゝ言語が征服者と云へども同化し得ないことは、ローマ帝國に於けるギリシアにもその例を見る。ローマ人はイタリア、ゴール、ダキア、ギリシアを征服シラテン語を輸入したが、ギリシアにだけはラテン語を植ゑつけることが出来なかつた。

日本文化の成立を考へ、わが國語の根本が膠着語であることを考へると、わが國語が北方系であり、ウラルアルタイ語族と系統的關係を持つてゐるものであると推論することの自然なことは何人も疑ひ得ないところであらう。然しながらこれはどこまでも推論にとどまり、かゝる系統論を實證するに足るだけの研究はまだ出來て居らず、今日まで世に現れてゐるものは皆不完全なものゝみであることは前に述べた通である。

多くの論者が日本語を十分研究してゐない外國人であることを考へれば、それが粗雑な獨斷論に終つてゐることも偶然ではない。その中にあつて傾聽すべき節のあるのは新村出氏の國語系統論に見える多少の考證である。

先生は國語の複數接尾語「たち」を朝鮮語の *toi* に比較し、ウラルアルタイ語族のモルドヴィア語の *t*、ヴオグール語の *t*、オスチャク語の *-ti*、トルコ語の *-lar* (*lar*)、ツングース語の *-gal*, *-hal*, *-ul*, *-il*, *-r*、滿洲語の *-sa*, *-ta*, *te*, *-ri*、蒙古語の *-nar* (*ner*), *-ut*, *-od* (*-öd*)、フリヤート語の *-nar*, *-ut* と對應するものと見られる。上代語の主格を示す「い」もフィン語の *i* の如きものと對應し、對格の「を」はラプラント語の *b*、ヴオグール語の *me*、チェレミツス語の *m*、フィンランド語の *n* ($\wedge m$) 等 *b* *m* の形に歸せしむべきものと對應し、一方ツングース語に *-va* (*-vä*) *-ma* (*-me*) として現れることから推して、「を」は *-bo* \vee *-vo* ? \vee *-wo* の經路を經たものでないかと疑はれる。「の」についても大陸に *n* の形を見出すことが出来る。又數詞の五及び六に似た形をフィン、ウグリヤ語及びサモエド語の上に對應を求められ、單語についてはこれまで指摘されたものゝ外、日本語の大郎ち *opo* は滿洲語 *omba* (多少) と關係があり、水のムレン、汁のシロ (オロッコ語) 霜のシヤ (*Sina*) 薜のモシリ、旋風の *tonji* (あらし) などが國語に通ずると云はれる。

これを見てもその比較が如何に困難であるか、又この問題解決の前途が如何に遼遠であるべきか容易に推察できよう。今日に於てウラルアルタイ語との關係がどの程度であるか全く云ふ所を知らない。

一八九三年にはじめて知られ、その後一九〇五年から一九〇七年にかけて土耳其の首府アンカラに近いボグズケヨイ (*Boghazkoi*) に於ける大發掘によりヒッタイト (聖書のヘテ人) の言語の楔形文字で記されてゐるものが發見された。この言語は耶蘇紀元前十九世紀乃至十三世紀のものとして云はれる。學者によつて印歐語との系統的關係が探求されるやうになつて印歐語の姉妹語か又は姉妹語から續出したものであらうと云はれ、之によつて原始インド、ヒッタイト祖語と云ふものを想像する學者も出てゐる。然しヒッタイト語は形態的性質に於ては印歐語と似てゐるが、音韻語彙文章法等の側に於ては別種のコーカサス語族リディア語リシア語等と似てゐることに由て、その系統的關係を明かにすることが困難な實情にある。すべて古い言語の研究は困難である。國語がウラルアルタイ語に系統的關係があるとしても、我々が知り得るウラルアルタイ語と日本語との距離はヒッタイトと印歐語の比ではあるまい。ウラルアルタイ語に屬する何らかの言語が日本語の祖語であるとか或は祖語の姉妹語であるとしても、祖語も亡び之から後出した言語も遠い昔に於て亡びて今日に何ら迹を留めてゐないかも知れない。その上に國語と比較される滿洲語蒙古語その他の言語が今日知り得る形になるまでも測るべからざる變遷を経て居り、そのみならず日本語がこの國土に成立つまでに、時代による變遷と南方系言語の興へた變化の加つて居ることを想像すれば、わが國語の系統的研究所如何に困難であるかは推察に餘がある。

國語學通論 (1200冊)

昭和十九年十二月二十日初版印刷
昭和十九年十二月三十日初版發行
出版發行 永澤書號 5101111
定價 六圓九拾錢
左定番號 四ノ一四二號(種)

新本

著者 小林好日
仙台市米ヶ袋中坂通
發行所 八坂淺太郎
東京 神田 駿河臺
京都 田中 西浦町
岩本米次郎
東京 神田 小川町

郵送元 東京 神田 田區
神田二ノ九
日本出版配給統制株式會社
發行所 東京 神田 駿河臺
番號一〇五三四 弘文堂書房

(番丁、冊丁は御取換致しませ)

(東京18) 愛光堂印刷・會田製本

985
125

終